

追憶 林文子先生

林文子先生と健康文化

田中 良明

このたび、「健康文化」が第50号記念号の発刊を迎えられたとのこと、まことに慶賀の念に堪えません。これもひとえに財団創設時にその設立に奔走された故・林文子先生の尊いご遺志と、それを支えてこられた関係各位のご尽力の賜物ではないかと思われます。この機会に、在りし日の林先生のお姿を回顧しながら、改めて先生への感謝の意を込めて健康文化について記してみたいと思います。

林先生との出会いは、私が名古屋大学医学部を卒業し1年間のインターンを終えて放射線科に入局した昭和42年(1967年)4月から始まります。その後、私のほうは昭和52年(1977年)3月から米国のニューメキシコ大学癌研究治療センターおよびロスアラモス中間子研究施設への1年間の留学、その後は浜松医科大学、東京都立駒込病院、日本大学医学部と名古屋を離れての異動が続きましたので、林先生と接することができたのは最初の10年ほどの期間になります。しかもこの間、林先生のほうは聖路加国際病院に赴任され、その後、東市民病院に放射線科部長として戻ってこられたという事情もあって、医局で直接、林先生から指導を受けたのは僅かな期間ということになります。それでも、林先生の傍で体験した出来事が今でも記憶に留まっているということは、それだけ先生から受けた印象が強かったからといえるでしょう。

まず入局当時のことですが、実は私たち医学部の卒業クラスは、インターン闘争の真っ只中にいた関係で、卒後1年目の春の医師国家試験の受験をボイコットしており、大学院生として放射線科に入局したものの、医師免許を持たない見習い医師まがいの身分で医局生活を過ごしておりました。これにはさまざまな事情があったのですが、当時は学生運動が盛んな頃で、無給医問題や身分保障のないインターン制度が社会問題になっており、われわれの卒業年代は全国的な組織活動の中でインターン制度廃止というスローガンを掲げて実力行使を行うまでに発展していたのです。こんな訳で、その年の秋に国試を受験して(当時は、年2回、春と秋に国試がありました)、医学部卒業後1年半にしてようやく医師免許を取得し、晴れて一人前になれたのです。

このような世情を述べましたのは、その当時の医局生活と大いに関係があったからで、入局はしたものの無資格のまま医療行為に従事して医局の先輩の先生方にさまざまな事を教えて頂いたのですが、林文子先生には殊のほかお世話になった気がします。林先生はこのような特殊な状況下にいた私たちに同情してくださり、当時のインターン制度や大学医学部の無給医制度は決して好ましい状態ではなく、あなた方の社会的活動はそれを正そうとするのだから、自分もその辺の事情は理解できるし応援してあげる、というような言葉を頂戴し励ましてくださいました。正義感の強い林先生には、当時の矛盾に満ちた社会の仕組みには承服しかねると思っておられたのでしょうか。私たち新入医局員を前にして、これから社会人として育っていく過程で大切なこと、それは間違ったことに関してひるまずに立ち向かっていくことであるということ、自らの行動パターンを手本にして示してくれたのではないのでしょうか。女性医師でありながら、その辺りのことははっきりとものを述べておられるお姿に対して、多感な時代を過ごしていた若者にはすごく共感を覚えたことを覚えております。

いっぽう林先生といえば、先生ご自身が指導を受けてこられた恩師の先生方の指導ぶりの様子を、われわれ若手医局員に好んで聞かせてくれました。具体的には、名古屋大学に来られる前に在局しておられた長崎大学医学部放射線科での出来事についての話でしたが、立入弘先生（後、大阪大学放射線科教授）、玉木正男先生、本保善一郎先生がたから指導を受けた心血管などの放射線診断に関する話が主でありました。心血管造影は当時の最新の放射線診断技術であり、聞くことすべてが斬新で目新しく、若者の興味を引きつける要因を持っていました。そしてそれぞれの恩師の先生方が、その場その場でどのような考え方に基づいて発言し、行動しておられたかを、林先生の中から見た寸評を交えて話ししてくださいました。それはある意味では、先生ご自身の価値観や道徳観などのフィルターを介したものであったと思われるのですが、含蓄に富んだ話を若手の人たちに伝えることで、ご自身から人の世での正しい身の処し方についてわれわれに悟り話をしてくれていたような気もしました。つまりは、人生経験の乏しい若者の日々の振る舞い方に関して、恐らく林先生も気がかりに思われることが多々あり、それを正すことはご自分の仕事であると思っていたからではなかったかと推測されるのです。

今となってみると、人間の行動に関してその規範となるのは物事の善し悪しに関する判断力であり、それを日々の人生経験の中で育てあげていくことの重要さを教えてくださったのではないのでしょうか。既成の場にいることに満足せず、絶えず外に眼を向けて多くの先輩や同輩の人たちと接する機会を持ちなさ

いと勧めてくれたのも林先生でした。いわゆるチャレンジ精神といってもいいかもしれません。そのような影響もあり、私自身の職歴を振り返ってみても、大げさな言い回しかもしれませんが、異動の際の分岐点ではいつも後押ししてくれていたような気がします。

林先生がご逝去されてから22年が過ぎでなおこのような体験談を記すという背景には、先生の影響がそれだけ大きかったといえるでしょう。今でも思い出しますが、林先生からはよく食事などにお誘いして頂き、その際に人生訓のようなお話を拝聴させて頂きました。小柄ですが、しゃきしゃきした話しぶり、その明快な理論体系に感服させられました。眼鏡の奥からきらりとしたまなざしで話しされるお姿に、若者はひきつけられたのです。そして帰り際に食事代を支払おうとすると、「田中ちゃん（どういう訳か、いつもこう呼ばれていました）、いいの、いいの。あなたが一人前になって懐に余裕ができたならその時にお返ししてちょうだい」、と言ってくださり、いつもそのご好意に甘えておりました。そしてそのお返しをする機会もなく、愛知県がんセンターに入院中の際もお見舞いにも行けず、ご逝去の報を受け取ったことを今になっても悔恨の極みと思っております。

改めて言うまでもありませんが、人が健康であるということは、肉体的のほかに精神的な要素が多分にあると思います。家庭においても職場においても、人間関係においてひ弱な体質の持ち主は家事や仕事を全うすることができず、そういった意味では、心身ともにバランスの取れた健康状態が望まれるわけです。林先生からは多くのことを教えていただきましたが、その中に健康であることの重要性、尊さの真の意味が含まれているような気がします。「健康文化」という財団紀要を発行され、それが脈々と続けられていることに改めて先生のご遺志の尊さを実感しております。

(川崎幸病院 副院長・放射線治療センター長)